経験論の再生と二つの超越論哲学

――セラーズとマクダウエルによるカント的直観の受容／変奏をめぐって――

三谷尚澄

序

本稿のテーマは、ウィルフリッド・セラーズとジョン・マクダウエルという二人の哲学者について、とくに彼らのカント理解に注目した上で、両者の哲学的主張を比較・検討することにある。ただし、最初に断っておかなければならない。セラーズとマクダウエルをよく知るジェイ・ローゼンバーグの言葉によれば、この二人のカントは「アポロン的ではなくデュオニソス的」(Rosenberg, 2005, p. 2f.)である。すなわち、彼らのカント研究は、テキストに綿密な読みを施し、解釈が微妙な割れを示す点には慎重な文献学的注意を払い、他の哲学者たちとの知的関係や広範な歴史的文脈への目配りを忘れず、といった用意周到で秩序だった方針のもとに遂行されるものではない。

そうではなく、彼らの記述は、歴史の中にあるカントからの逸脱を恐れず、剛腕にものをいわせて自分の問題関心へとカントを引き付け、自分は「著者が語っている対象について、著者その人以上によく理解」(A314/B370)していることを断言し、ことの真相をついた説明を与えるためにも「カントはこう書くべきであった」とカントその人に対して「あるべきカントの姿」を指示することをためらわない(cf. HWV: 3f.)。

彼らが提示する、あまりにも荒々しくて強引なカントの姿は、たしかに、正道を踏み外した行儀の悪い解釈として良識ある研究者たちの眉をひそめさせるものであるかもしれない。しかし、（とりわけカントのように）長く分厚い研究史をもった哲学者をあらためて論じようとするにあたっては、この二人のカント解釈のように荒々しく乱暴な手つきの中に新しい発見の可能性を求めてみるのも一つの選択肢ではないか、というのが私の正直な感想である。本稿は、そのような見通しのもと、カントその人からの逸脱を恐れず、乱暴で不正確なカントの中に新しいカントの魅力を読みとることを目指す一つの試みである。

1. 「ウッドブリッジ講義」と『科学と形而上学』: カント的直観の論理

「セラーズとマクダウエルのカント」という主題を検討するにあたって最初に参照されるべきは、マクダウエルが 98 年に発表した「ウッドブリッジ講義」である。「ウッドブリッ

ジ講義」において、マクダウエルは、彼がカントのプロジェクトを独自の路線で継承することを明言した『心と世界』に続いて、セラーズのカント解釈が最も体系的な仕方で示された『科学と形而上学』―「カント的主題の変奏」という副題をもつセラーズ第二の主著―を取り上げ、集中的な検討を施しているからである

しかし、ここで話を先取りしておくならば、マクダウエルの読むセラーズのカントは、主題とされているカントのテキストに対してだけでなく、セラーズのテキストに対しても奇妙なズレを示している。あるいは、ありていに言ってしまえば、本稿の注目するテキストの範囲において、マクダウエルはセラーズの解釈者として自己規定した上で彼なりのセラーズ論を展開するのであるが、それにも関わらずマクダウエルの記述はセラーズの姿を適切に捉えたものとはなっていない。そして、私見によれば、この奇妙なすれ違いは、そのあり様を考察することから、カントの哲学的洞察をめぐるきわめて興味深いコントラストを引き出すことのできる有益なすれ違いである。以下、そのような事情を念頭に置きつつ、マクダウエルのテキストをみることにしよう。「ウッドブリッジ講義」におけるマクダウエルのターゲットは、カント的「直観」の概念をめぐってセラーズが展開する次のような議論である。

「感性的直観が印象の受容性に基づくように、概念は思考の自発性に基づく」(A68/B93)。この言葉に代表されるように、カント哲学の根底には「感性／悟性、受容性／自発性、直観／概念」という二元的な区別が存している。また、セラーズによれば、こういった能力心理学上の区別はカントの偉大な哲学的洞察であり、これら「心性の二つの根本的な源泉」(A50f./B74f.)の区別は、「概念的表象と非概念的表象」というセラーズが関心を寄せる区別とも対応しているように思われる。

しかし、セラーズによれば、カントにおける「直観」はこの区別に関してヤヌス的な相貌をみせる。カントのテキストは、感性の受容性として直観の能力を規定するかたわら、産出的構想力による超越論的総合の局面において「直観における概念的表象」の成立を述べてもいるからである(B151f.)。カントが示す表象の一般的分類を参照するなら、「意識を伴う表象（perceptio）が単に主体の状態の変様としてのみ主体と関わる場合には感覚であり、客観的知覚は認識である。認識は直観か概念のいずれかである。前者は直接に対象に関係し個別的である。後者は間接に、複数の事物に共通しうる表徴を介して対象に関係する」(A320/B376f.)。

カントにおいて、直観は認知的内容を含んだ「認識」としても分類される表象なのであり、それゆえ、直観という用語は「産出的構想力の総合作用によって形成される表象と、受容性の純粋に受動的な表象の両方に適用」されていると言わざるをえない。そして、こ

のようなテキスト上の混乱を受けて、「まったくの受容性以上のものを含んだ直観と、そうでない直観」を厳密に区別する必要がある、とセラーズは提案する(SM: 4ff.)。

ここで、カントのいう「直観」の表象に加えて、「まったくの受容性に帰属し、いかなる意味においても概念的でない、根本的に違った種類の表象」(SM: 7)が要請されることの背景には、「所与の神話の解体」をめぐるセラーズの古典的見解が存している。「経験論と心の哲学」が語るところによれば、「命題的内容をもった認知的経験」と「概念内容をもたない非認知的経験」が「雑種的に混交 a mongrel resulting from a crossbreeding」された「認知的プリミティヴ」を想定するところに典型的な所与の神話が成立する(EPM: I.7)。後にマクダウエルが多用するメタファーによるならば、「理由の論理空間」と呼ばれる「概念による正当化の空間に帰属する表象と帰属しない表象」を区別する「線」の「上」と「下」をまたいだ越境的な表象の構成という事態の中に、セラーズは所与の神話をみてとっているのである(HWV: 5)。

そして、マクダウエルのメタファーを継続するならば、雑種的混交が解消された後もなお「線の上」と「線の下」のそれぞれにおいて生き残るものは何なのか、という点を明らかにすることにセラーズの狙いは定められている(HWV: 13)。カントの直観概念の中に、伝統的基礎づけ主義者に通じる所与性のにおいをかぎとったセラーズは、線の「上」と「下」に帰属する要素の峻別を要請することで、神話への転落を回避しようとするわけである[(1)]。

さて、先にみた通り、線の上に帰属する直観の表象のあり方は、すでに悟性を含んでおり概念的性格をもつ。ただし、カントにおける直観の表象は、判断の表象におけるように「概念を解して間接的に」対象と関わるのではなく、「印象の受容性を介して個別的にそして直接的に」対象と関係するものである。そして、このように見定められた「線の上」におけるカント的直観の表象について、セラーズはその特性を「このしかじか this-such」という文法的形式のもとに理解することを提案する。(SM: 7)

セラーズによれば、「このしかじか」としての直観の表象は、「この」という指示詞を通じて「個別的対象への直接的関係性」を、そして、「あるものを一つの**この**として表象することは概念的である、という特殊な仕方」で「直観の概念的性格」をうまく掬い取ることができる(SM: 3)。また、「このしかじか」としての直観の表象は、「判断におけるさまざまな表象に統一を与えるのと同一の機能は、また、直観におけるさまざまな表象の単なる総合にも統一を与える」(A79/B104-5)というカントの洞察を受け継ぐものでもある。産出的構想力によって総合された表象（「このキューブ」の表象）が、それ自体は判断ではないにせよ、判断の形式をもった表象―「これはキューブである」の表象―と密接な関係をもつことは明らかなことだからである。

2. マクダウエルにおける「カント主義」の内実

さて、カント的直観をめぐるセラーズの提案の中に、マクダウエル独自の哲学的主張と同種の内容をみてとることはそれほど難しいことではない。ここで、マクダウエルの思考を特徴づける最大の哲学的主張とは、「悟性と感性の協働」(MW: 9)をめぐるカントの洞察を、次のような仕方で継承しようとする点に見出されるものである。

一般に、「概念なき直観は盲目である」という言葉で知られるカントの洞察は、概念能力が直観を通じて世界の実在的あり方と関係することを通じてのみ、われわれの経験内容の志向的性格―認識が世界に「ついて」のものであること―は保障される、ということを主張する。しかし、哲学の現状をめぐるマクダウエルの診断によれば、感性・悟性という認識の両輪をめぐるカントの洞察は、以下のような事情によって正当に継承されてこなかったのであり、哲学はカントが脱出路を示したはずの苦境の中で苦しみ続けている。

マクダウエルはいう。われわれは、一方で、受容性と自発性という二つの能力のうち、概念能力と切り離された「純粋な受容性」としての非概念的感覚印象を過度に強調し、非概念的能力が概念的能力とは独立に他の知識を基礎づけうる、と想定することによって「倫理学における自然主義的誤謬と同種の誤り」(EPM: I-5)ないし「所与の神話」と呼ばれる困難に陥ってきた。他方、所与の神話からの退却を強調するあまり、受容性に変わって自発性の側面が強調され、「概念能力だけで経験的知識の正当化が可能である」、というこれまた極端な立場へと退却することで、哲学が「直観との関係を持たない概念能力の行使という表象との無意味な戯れ」、すなわち、世界とのつながりを欠いた「空虚の中の摩擦なき空転」へと転落する様をもわれわれは目撃してきた。(cf. MW: 66)

このように、カントの言及する経験の二つの源泉のうち、いずれか一方に過度の強調がおかれることによって、知識の経験的基礎づけをめぐる哲学的課題は「止まらない振り子」と呼ばれる二者択一のジレンマに陥ってきたのである。そして、以上のような仕方で問題のありかが特定されることは、「思考と実在との関係の仕方をめぐる議論において、カントがいまでも中心的位置を占めるべきであること」、すなわち、経験の成立構造をめぐるカントの根本的洞察を回復することによって、知識の経験的基礎づけをめぐる不必要な混乱は非常にシンプルな仕方で治療されうることを教えている。

重要なのは、カントと共に「受容性の能力は因果的関係を構成要素とする世界からの非概念的入力（brute impact）だけを受け取るのであり、概念の秩序は因果的世界の外部としての心の領域から与えられる」という不毛な二元論から身をふりほどくことである。感性と悟性の協働において、「受容性が名目的にでも悟性とは別個の貢献をなす」と考えてはな

らない。カントの真意は、「概念の領域をこえたところから受容性が届ける内容に対して概念能力が行使される conceptual capacities are exercised on extra-conceptual deliverance of receptivity」のではなく、「概念能力は受容性の中においてすでに発動されている drawn on in receptivity」ことを教えるものとして受け取られるべきである(MW: 9)。カントにおいて、判断において行使されるのとまさに同じ概念能力が最初から感性的意識を形成しているのであり、「印象の受容性はそれ自体が概念的内容をもつ」(cf. EW: 249)。

別言するならば、受容性において世界はすでに概念化された形式で姿を現すのであり、知覚経験において概念的思考に合理的制約を課すのは世界の客観的構造それ自体なのである。「理由の空間が心の内側へと内在化される interiorization of the space of reasons」ところに問題の根が存するのである以上、困難の解消は「心と世界の境界面 interface を消去し、理由の空間を世界の側にまで外在化すること exteriorization」に求められるのでなければならない。われわれの心が「世界に対する直接的開け」を獲得するところにわれわれの知識を基礎づける「経験という裁きの場」が開かれる。これが、マクダウエルの考えるカントの根本的洞察なのである。(KIR: 243ff./279ff.)

3. セラーズにおける「非伝統的経験論」の再生

以上のようなマクダウエルのスタンスが、直観の表象を「このしかじか」という観点から理解するセラーズの発想に親和的であることは明らかであろう。「直観の表象はそれ自体が概念的内容を含む」というセラーズの主張は、「概念能力は受動性において現実化されている」というカントの根本的洞察を適切な方針のもとに捉えたものであり、「線の上と下」をまたいだ「越境的表象構成の禁止」の裏面で、「所与の神話に陥ることなく知識の経験論的な基礎を確保する」可能性を教えるマクダウエルの発想と本質的な部分で重なるように思われるからである(HWV: 24)。

そして、マクダウエルのみるところ、「知識の経験的基礎づけ」をめぐる上のような発想は、セラーズの哲学体系全体に通底するモチーフでもある。マクダウエルによれば、セラーズの主著「経験論と心の哲学」は、「非伝統的な形態においてであるとはいえ、経験論を再生する試み」として読まれるべきなのである(2)。この点について、マクダウエルがセラーズ哲学の「要をなす思考」として言及するEPMの記述を参照してみよう。「経験的知識は基礎をもつか」と題されたEPM第VIII章におけるセラーズの次のような言葉である。

「人間の知識を次のような仕方で描き出すことには明らかになんらかの意義が認められる。すなわち、人間の知識はあるレベルの命題―観察報告―に基づいているのだが、このレベルの命題は他の命題がそれらの命題に基づくのと同じ仕方でその他の命題に基づいて

いるのではない、と。他方、私は「基礎」という比喩は誤解を招くものであると主張することを強く望んでもいる。すなわち、他の経験的命題が観察報告に基づく論理的次元があるにせよ、観察報告が他の経験的命題に基づく**もうひとつ別の論理的次元**が存在するのだ、ということを基礎という比喩がみえなくさせるのであれば、それは誤解を招くものである、とも」(EPM: VIII-38／強調は引用者)。

現在のわれわれの関心からして、注目するべきは「知識の基礎」の可能性をめぐって言及される「もうひとつ別の論理的次元」という言葉であろう。というのも、「知識の基礎」という比喩は、「観察報告が他の経験的命題に基づくもうひとつ別の論理的次元」をみえなくさせる限りにおいて誤解を招くものである、という言明は、実質的に、「観察報告が他の経験的命題に基づく第二の論理的次元」を確保することさえできれば、知識の基礎という比喩を用いることに特段の問題は伴わない、という主張を含意しているからである。

伝統的基礎づけ論者が想定する通り、「非推論的な観察報告」がすべての知識の基礎づけを与える「特権的な知識の層」を構成するにせよ、このことは「非推論的に知られる命題でも背景となる知識を全体論的な支えとして前提している」というこれまで真剣に検討されてこなかった可能性を排除するものではない。そして、「他の事実的知識を前提する知識は推論的に知られるのでなければならない」という「認知的アトミズム」（セラーズによれば、この想定もまた「所与の神話の一形態」を構成するものである）の回避が可能であるならば、われわれは風呂の水と共に「経験的知識の真偽をめぐる最終の上訴裁判所」という赤子までをも捨ててしまう愚を避けることができる。おおむねセラーズはそう主張している。(EPM: I-32)

もちろん、ここでのセラーズの構想は、あくまで将来的に換金されるべき「約束手形」として提示されているにすぎない。セラーズは、「非推論的に真であると知られる観察報告がそれ以外の知識を前提している」ということ、より直裁な表現を用いるなら、「他の事実的知識を前提するにも関わらず推論を介して真と知られるのではない知識」という撞着語法に近い考えを整合的に説明し、「約束手形」を首尾よく換金してみせなければならない。しかし、さしあたり、その間の事情をめぐる詳細は後に検討することにして、ここではセラーズが振り出す手形を信用可能なものとして受け入れた上で、「セラーズとマクダウエルの親近性」を考察する上で最低限必要な情報だけを確認し、話を次の段階へと進めることにしよう。

当面の問題をめぐるセラーズ自身の見解を理解する上で重要なのは、セラーズが人間の心的活動を「行為 action」ではなくある種の「反応 response」ないしは「作用 act」として、あるいは、アリストテレスのいう意味での現実態（傾向性や性癖が現実化されたもの）と

して捉えている、という点である。例として、「強盗がいる」という観察報告がなされる場合のことを考えてみよう。

健全な常識が教えるとおり、「家に帰ったら玄関の鍵が開いていて、中で見知らぬ人間が箪笥を探っていた場合には、その人間は強盗である」という意味論的規則があり、目撃者がその規則を<わが家の中の見知らぬ人間>のセンスデータへと意図的に適用することによって、「強盗がいる」という観察報告が「行われる」わけではない。そうではなく、事情はむしろ次のようなものとして理解されなければならない。リトマス試験紙は、特定の状況において青色に変化する傾向性をもち、特定の環境的要因にさらされることによって現実態としての青色を発現させる。そして、それと類比的に、われわれには「これこれの状況では強盗がいるという考えが生じる」という「信念」が傾向性としてもたれており、特定の状況に身をおくことがきっかけとなって「強盗がいる」という知覚報告を行う能力が「心的できごと episode」として現実化されるのである(LTC: 72f.)。

このような意味において、思考（知覚経験）とその表立ったトークンとしての観察報告は、「行為」ではなく「特定の思考を引き起こす傾向性としての信念 belief as a disposition to have a thought that-p occur」が現実化されたという意味における「心的作用 mental act」なのである(MFC: 84)。知覚とは、「行為者が意図的に行う何か」ではなく（「赤い三角形をみよう」とわれわれが意図的に行為することはないし、われわれは、意図的に緑の四角形を赤い三角形としてみることはできない）、「知覚された対象によって知覚者から引き起こされるないしは無理やりに搾り出される」(EPM: III-16)性質をもつものとして理解されるのである。マイケル・ウィリアムズの印象的な言い方によれば、正しい知覚が生じるために「知覚者がしなければいけないことは何もない」(Williams, 2006, p. 315)。

4. マクダウエルによる「非伝統的経験論の再生」と「超越論的経験論」の構想

話を再びマクダウエルに戻そう。マクダウエルは、自らの考える「非伝統的経験論」の構想を、セラーズの提案するカント的直観の理論と重ね合わせて理解している。そして、マクダウエルの主張に特徴的なのは、概念的／公共的判断に先立つ「個人の経験」に知識の基礎が求められている点である。感性を通じて受容される印象は最初から概念的内容をもち、それゆえ知識の基礎は最初から概念的秩序の内部にその場を有する。判断に先立つ仕方で構成される「概念内容をもった受動的経験」という発想を核とするマクダウエルの「非伝統的経験論」は、「心的作用」としての知覚が有する「絞り出される」経験としての性格を、「自発的判断」に先立つ「非判断的正当化子 non-judgmental justifier」として理解する。「経験において、人はものごとがしかじかであるということを受け取る、例えば、みる。

そして、ここでいう受け取られたものを対象として、人は例えばまた、判断を下すことができるのである」(MW: 9)。

以上のマクダウエルの見解は、「知識の経験的基礎」のあり方に関するある強い含意をもつ。「世界に直面して立つこの私」が世界をありのままに「受け入れる、例えば、みる」という経験が知識の基礎として機能する、という含意である。

「小さすぎるとか遠く離れすぎているなどの理由でみることのできない対象があるが、これらの対象に思考を差し向けることができない、というわけではもちろんない。しかし、そのような対象へと差し向けられた思考は、いわば、理論によってその対象にまで運ばれるのである。理論の究極的な信任状は**経験の中に存する**のでなければならない。そして、・・・理論の究極的な信任状が**経験の中に存する**、という考えをわれわれが理解することができるのは―すなわち、「世界がしかじかのあり様をしていると**みること**」から成り立つものとして経験を理解することができるのは―われわれが対象を**みること**として経験を理解することができるから、という理由にのみ基づく」(HWV: 37；強調は引用者)

マクダウエルは、知識の究極的な信任状を与える「経験」ないし「非判断的正当化子」を、世界に関する「みえ」もしくは「現れ」として理解している。「〔マクダウエルの考えを〕適切に特徴づけるのは、経験は客観的実在についてのものであると主張することである。知覚経験がなされるとき、その経験は、少なくとも、知覚者に対して、環境内のものがあるあり方をしている、という現れ方をするのである」(DCE: 230)。このような仕方で知識の基礎を定式化するマクダウエルの「非伝統的経験論」は、実質的に、「超越論的経験論」の名で呼ばれるにふさわしいものといえるであろう。(EW: 248)

さて、セラーズは確かに「経験論と心の哲学」の著者であり、経験論的な立場からの知識の基礎づけ、すなわち「非伝統的経験論の確立」を目論んでいる。このようなマクダウエルのセラーズ評価が、それ以上の含意をもたない、「経験論」という用語の使い方に関して中立的な主張であるかぎり、本稿はマクダウエルのセラーズ評価に同意する(3)。しかし、そこから一歩を進めて、知識の正当化の拠点を「個人の経験」に求める「超越論的経験論」をマクダウエルが主張するとき、セラーズのテキストを繙いた経験をもつ者にはなにがしかの不安ないし違和感が生じざるをえなくなるように思われる。あるいは、1 節で述べたように、マクダウエルの語るセラーズは残念ながらセラーズその人の姿を適切に捉えたものとはなっていないのではないか、という懸念が生じざるをえなくなるように思われる。考察を掘り下げる手がかりとして、マクダウエルの次の文章をみよう。

「セラーズが観察報告に与えている知識論上の位置を、私は単純に経験に与えている。私の構想において、経験は概念内容をもつのであるが、このことはセラーズが有している

知識論上の道具だて―概念的なものに関する全体論―と同様のものを私が有している、ということを意味する」(EW: 254)。

先にみた通り、「知識の基礎づけ」を与える特権的な知識の層のあり方について、「観察報告が他の経験的命題に基づくもう一つ別の論理的次元」という新しい「知識論上の道具立て」を検討してみる必要があるのではないか、というのがセラーズの提案であった。そして、「特権的な知識の基礎ですら最初から概念の秩序（理由の論理空間）の中に位置するのであり、その他の経験的知識を全体論的支えとして前提するところに成り立つ」と考えるセラーズの発想には、「概念内容をもった経験」に知識の経験的基礎を求める自分のカント的発想との同質性を見出すことができる。そうマクダウエルは主張している。

しかし、問題は、上の引用文でマクダウエルが「単純に」の一言でさらりと宣言する「観察報告」から「概念内容をもった受動的経験」への置き換えが、マクダウエルが考えるほど些細な事柄であるのかどうか、という点にある。この置き替えは、両者の哲学的同質性ではなく、むしろ根本的な哲学的相違ないし異質性を浮き彫りにするものではないのか。考察を導くのは、先に「約束手形」として振り出したまま放置してあった「第二の論理的次元」の具体的構造を明らかにする作業である。

5. 知覚報告と二種類の規則：セラーズのカント再論

確認しよう。セラーズは、知覚報告を「意図的行為」ではなく「傾向性の顕在化」ないし「因果的作用」として理解する。しかし、同時に、「知識の正当化」という役割を果たす項目は、因果的領域だけでなく概念の領域にも帰属するものでなければならない。すなわち、観察報告は（リトマス試験紙の場合と異なり）単なる因果的反応としてだけではなく意味論的正しさの評価対象としても位置づけられるのでなければならない。この点を、セラーズは、正しい／正しくないという規範的評価の対象とされる限りにおいて、観察報告の示す斉一性は「稲妻―雷鳴の示す斉一性」ではなく、「規則に従うことに伴う斉一性」でなければならない、という言い方で表現している。(EPM: III-35)

では、「傾向性が現実化されたもの」としての知覚、もしくは「心的作用」として特徴づけられる知覚の正しさを判定する規則とは何か。この問題に対するセラーズの解決策は、長年にわたるカントからの深い影響のもとに考案されたものである。セラーズのカント論をテーマとする詳細なコメンタリーを書いた Jeffrey Sicha は次のように述べる。「規則に従うこと」の正しさが問題であるとすれば、「規則に従うこと」の問題をカントに読み込むことができる、というのがセラーズの考えである。カントにおいて「概念の能力」としての「悟性」は同時に「規則の能力」（A126）のことでもある。また、論理学の規則は「正し

さの基準 canon of correctness」を与える(A50/B74)ものであるが、悟性の規則とは、われわれの思考が「どのようであるべきか」を教える「正しさの規則」として理解されるもののことである。(cf. Sicha, 2002, p. 230ff.)

さて、「規則に従うことの正しさ」をめぐるセラーズの提案の核心は、「べき」には二種類の「べき」がある、という発想に求められる。セラーズによれば、すべての「べき」が「するべき ought-to-do」すなわち「行為の規則」であるとはかぎらないのであって、われわれは「行為の規則」に加えて「批判の規則」(「であるべき ought-to-be」の規則）というものが存在することに注意しなければならない。前者は、「状況 C のもとにあるとき、X は A するべきである」という定式によって表現される。また、後者は、「しかじかの状況にあるとき、X は状態 ϕ になければならない」という定式によって表現される。後者の例としては、「時計のチャイムは 15 分ごとに鳴るべきである」という文などを挙げておくことができる。（LTC: 59；以下、ought to be を O-B、ought to do を O-D と略記する。）

両者の区別に関して重要なのは、O-D 規則に従う主体は規則の内容をあらかじめ理解していなければならないのに対して、O-B 規則に従うものが規則の内容をあらかじめ理解している必要はない、という点である。この区別がもたらす帰結の重要性を確認するために、O-B 規則に依拠した「作用としての知覚」に言及した次の引用をみよう。

「これらの種類の活動は、すべてパターンに統治された活動であるが、これらの行動があるパターンを示すのは、それが特定のパターンを示そうとする意図によって引き起こされたからという理由によるのではなく、そのパターンを出現させる傾向性が選択的に強化され、またこのパターンにあわない行動を出現させる傾向性が選択的に消去されてきたという理由によるのである」(MFC: 86f.)。

引用前半部では、知覚報告は O-D 規則に従って生じる意図的行為ではないこと、それゆえ、実質的に、「行為」とは違った種類の規則によって統治されるパターンを示す事象であることが述べられている。そして、われわれが注目するべきは、引用の後半部、「作用としての知覚が示す斉一的パターンを統治する規則」が「特定の反応を示す傾向性の選択的強化」、すなわちある種のオペラント条件付けとの関連において論じられている部分である。

先にも述べたとおり、知覚は「対象によって引き起こされるないしは無理やりに搾り出される」性質をもつ。リトマス試験紙がアルカリ性の環境要因に依存して因果的に青色へと変化するように、環境からの特定の因果的刺激へと依存的に「特定の思考を引き起こす傾向性としての信念」が顕在化され、トークンとしての観察報告が生じる。そして、「言語的プラグマティズム」ないし「発言行動主義 verbal behaviorism」と呼ばれるセラーズの構想は、このような思考を生じさせる傾向性を、言語共同体内部における訓練者の被訓練者

に対するある種のオペラント条件づけを通じて（すなわち因果的な条件づけを通じて）形成されるものとして理解することを提案する。

例えば、赤い対象をみたときに、「これは赤い」という発話を行う言語学習者の傾向性が訓練を通じて選択的に強化され、また、「これは緑である」という発話を行う傾向性が選択的に消去される。（この際、被訓練者が「しかじかの特徴をもった対象は＜赤い＞という音声によって指示する」という訓練者がわの規則をあらかじめ理解している必要はない。）そして、このような訓練ないし条件づけの過程を経て、最終的に、赤い対象物が提示されたときに「これは赤い」という発話を行う因果的反応傾向性が知覚者の中に形成されることになる。対象の色に応じた特定の弁別的反応を示す傾向性が、言語的発話という観察可能な行動パターンに関する訓練を通じて獲得される、という点に、セラーズ知覚論の特性が見出されるということである。

ここで、次の点を銘記しておこう。これらの因果的傾向性に基づく反応トークンは、「正しい言語的反応のパターン」を示すかぎりにおいて O-B 規則に従うもの、すなわち「正しい」反応としての評価をも受け取るものでもある。というのも、「観察報告を行う能力が言語共同体における適切な訓練を通じて形成された」という事実は、「これは赤い」という観察報告がなされたという出来事から、「実際に赤いものがある」という客観的事実を推論してよい、という規範的保障を与えるものとして機能することになるだろうからである。セラーズの言い方では、「言語空間への入場的移行」としての知覚報告において、世界の因果的秩序（物理的刺激に対する因果的反応としての「これは赤い」という音声）と言語共同体内部の規範的・論理的秩序（意味論的評価の対象となる言語トークンとして再記述された「これは赤い」という言明 saying）が編み合わされるに至るのである。(cf. LTC: 85f.)

6. 超越論的言語論の哲学：セラーズにおける「経験論」の根本的変容

以上のように、言語共同体内における訓練を通じて獲得される「信頼性」の権威に基づいて、「これは緑である」という観察報告には「これは実際に緑である」という客観的事実を保証する記述としての資格が与えられる。そして、セラーズによれば、このことは「真である」ないし「客観的知識である」ことの基準が、「観察報告という言語的出来事トークンが共同体の規則に合致したパターンを示すこと」というメタ言語的な基準によって定められている、ということを意味している。セラーズの次の言葉をみよう。

「私は、意味、真理、知識といった諸概念を、言語行動（と言語行動上の傾向性）に関わるメタ言語的概念として解釈するが、このことは、後者の言語行動ないし傾向性は「～であるべき」の規則に統治されている、という考えを含んでいる。ここでいう「～である

べき」とは、言語を世代から世代へと運び伝える訓練によってその規則に従った斉一的な行動が実現されるような規則のことである。この考えからは次のことが帰結する。論理的な、（より広範には）認知的な、カテゴリーが「～であるべき」（とそれに対応する斉一性）の一般的な諸特徴―それらは、言語が認知上の道具として機能するために必要とされるのであるが―を表出するのであるとすれば、この文脈における認識論とは、言語のこの機能をめぐる理論―約言するならば超越論的言語論―であることになる」(KTE: 451f.)。

本稿の主題であるセラーズのカント主義を一息のうちに集約したともいうべき一文であり、ここまでの考察を踏まえればセラーズの言わんとするところは明瞭であると思われる。ここでは、一点だけ説明を加えておこう。よく知られる通り、われわれの経験的知識が「成立すると証明すること」ではなく「現に成立している知識が、どのような構造の上に成立しているか」を明らかにすることがカントの課題である(KTE: 453)。そして、それと類比的に、われわれの言語が意味や真理値をもつための可能性の条件を、共同体における訓練を通じた発話行動の斉一性という観点から同定するプログラムとして、セラーズは「超越論的言語論」というカント的な構想を提案するのである。

では、以上のような仕方でセラーズの構想を見定めることは、「知識の経験的基礎」をめぐるマクダウエルとの「違い」について何を教えるのだろうか。成立構造を解明されるべき被説明項として、あるいは、神話の後に生き残る「概念的出来事」として、セラーズが「非推論的観察報告」を想定するところにマクダウエルは「みえ」という現象的意識を求めていた。われわれの心が「世界に対する直接的開け」を獲得するところにわれわれの知識を基礎付ける「経験という裁きの場」が開かれる。これが、マクダウエルの根本的考えであった。われわれは、ここで、このように要約されるマクダウエルの立場を、個人主義的ないし「心主義」的バイアスのかかった経験論と名付けることができるだろう。

一方、セラーズの経験論において、知識の基礎として機能するのは言語共同体内で実践される観察可能な発話トークンである。個人の心ではなく、共同体規模で実践される言語活動の全体が知識の信頼性を支える規範的根拠として位置づけられる。すなわち、セラーズの経験論は、共同体における言語活動の信頼性に重心をおいた「言語的経験論」であり、その限り、「世界を経験する私」に外在的に、そして、「世界に直面する私」の想定なしで知識の正当化拠点を確保する。言語的志向性に重心をおく経験論は、いわば「知識の主体なき経験論」としての性格をもつ。そして、それぞれ経験と観察報告に基礎を置く二つの経験論―超越論経験論と超越論的言語論の哲学―は、ここで決定的に分岐するのである。

繰り返しになるが、セラーズにおける非推論的報告とは、信頼するに足る傾向性が環境からの因果的刺激を通じて顕在化されることによって生じる「心的作用」のことである。

そして、ブランダムの指摘によれば、このテーゼはその重要な帰結の一つとして、「われわれが信頼するに足る仕方で報告を行うよう訓練されうるものであればなんでも非推論的知識の可能的対象となる」という含意をもつ。たとえば、適切な訓練を受けた物理学者は泡箱に生じた蒸気の跡からミュー中間子の存在を非推論的に報告することができるのであり、また非推論的に規範的語彙を使用することを学習した人間は報告の対象となる規範的事実を直接観察する、ということができるのである 。セラーズの非推論的報告は、観察的語彙の豊かさに関するいかなる原理的制限をも設けない。言語共同体内における訓練を通じて信頼するに足る弁別的反応傾向性が形成可能であるかぎり、あらゆる非推論的報告の対象は直接に観察可能な対象として位置づけられるのである。(Brandom, 2002, p. 363)

しかし、このことは、報告の対象とされうるすべてのものが「現象的みえ」としてわれわれに経験可能であることを含意しない。非推論的報告は「現象的みえ」として理解された「経験」よりも広い外延をもつ出来事として理解されるのであり、その限り「現象的みえ」の客観性を被説明項として指定するマクダウエルとの相違は明白であろう。

さて、しかし、以上の考察は、なお説明されるべき一つの問題を残しているように思われる。セラーズの「超越論的言語論」が「現れ」としての個人の経験に基礎を置くのでないにもかかわらず、なお「経験論の哲学」と呼ばれうるのはなぜなのか、という問題である。最後に、この点の考察を通じて、セラーズとマクダウエルという二人のカント主義者の違いをより鮮明にすることを試みてみよう。

ミュー中間子に関する観察報告からミュー中間子の存在を推論してよい、という許可を引き出せるのは、「個人の経験が理論を媒介とすることによって対象そのものにまで運ばれる」からではなく、研究者共同体の実践の積み重ね（歴史）を通じて、上記の推論の信頼性が確立されているからである。理論の正しさを正当化する究極の信任状は、世界に直面して立つ私の経験ではなく、観察報告の正しさを検証してきた共同体の実践に備わる信頼性である。その限りにおいて、セラーズの考える知識の基礎は個人の心ないし経験という枠組みをまったく前提しない。しかし、では、セラーズの考える知識の基礎が、それにも関わらず「経験論」の哲学としての性格を保持している、ということができるのはなぜなのか。この点について、「直接にものごとをみる」という経験とは違った種類の経験概念がある、という考えについて述べられたブランダムの文章をみよう。

「伝統的経験論のいう体験(Erlebnis)としての経験(experience)という考えと対照的に、プラグマティストたちは（ヘーゲルから教訓を学びつつ）経験を実地になすこと(Erfahrung)として理解する。プラグマティストたちにとって、経験の単位とは、知覚、行為、行為の結果の更なる知覚、を構成要素とする試行―操作―試行―退出のサイクル

(Test-Operate-Test-Exit cycle)である。このモデルでは、経験とは学習のプロセスに対する入力ではない。経験とは、学習のプロセスそのもののことである。・・・環境に適応している行動とは、環境内で繰り返し、かつ成功裏に行われている行動のことである。そして、環境に適応しているかぎりにおいて、われわれの行動形態は・・・淘汰を生き延び、習慣となる。ここでいう経験ないし学習のプロセスとは、そのような仕方で生き延び、習慣となった行動形態が選択されることによって、特定の行動形態が統計的に出現するプロセスのことを意味する。・・・プラグマティストは、独特の方向へと心のメタファーを移行させる。すなわち、鏡からランプへ、ではなく、望遠鏡と顕微鏡からフライホイール調速機(flywheel governor)へと、心のメタファーを移行させる」(Brandom, 2004, p. 4)。

ここでブランダムの言及する「Erlebnins ではなく Erfahrung としての experience」、すなわち、「やってみて、失敗して、またやってみて、できるようになるまで繰り返すこと」としての経験理解が、セラーズにおける非伝統的経験論の内容と歩調を合わせるものであることは明らかであろう。上にみた通り、特定の言語共同体という環境の中で、世代を渡って引き継がれる、言語使用者と言語学習者の間に成立する訓練と学習の過程に知識の信頼性の基礎を求めるのがセラーズの立場だったからである。

「状態」や「出来事」ではなく、「プロセス」としての構造をもつ経験の概念を前提に、知識の経験的基礎のあり方を新しく捉えなおすことができるのではないか。セラーズはそう提案している。「実際にやってみる」ことを「実験」と呼ぶとするならば、セラーズにおける非伝統的経験論のスローガンは「実験なくして経験なし」、あるいは、「実験なき経験は空虚である」というものであるかもしれない。

日常の言語理解とつきあわせてみるならば、「観察報告の権威を支える背景」として機能するセラーズの経験は、「三年以上の経験が必要」という形で求人情報欄に記載されるときの「経験」概念である。セラーズの構想する「第二の論理的次元」を支えるのはこの意味における「経験」であり、実験や訓練としての経験に知識の基礎を求める、という点において、セラーズの超越論的言語論は同時に「経験論」としての性格を持ち合わせている、ということができるのである。

終わりに

以上が、マクダウエルによる「超越論的経験論」とセラーズによる「超越論的言語論」という二つの哲学的立場のあり様である。本稿の考察によれば、両者は共に、カントを思想史的源泉として採用しつつも、まったく異なる方向に「知識の経験的基礎」を求める可能性をわれわれに教えるものであった。もとより、両者の哲学的洞察がもつ本来の奥行き

や射程といったものを、本稿の急ぎ足の考察から明らかにするのは望むべくもないことであろう。しかし、ここまでの大雑把なスケッチだけからでも、この二人のカント主義者たちが、それぞれ、これまでにはなかった独自の角度からカント哲学の継承を試みている、という程度のことは示しえたように思われる。

非伝統的経験論の提唱者としてのカント、というのは確かに問題の多い乱暴な提案であるかもしれない。しかし、この可能性に注目することで、知覚経験の選言主義的理解、知覚内容をめぐる概念主義の構想、認識論的信頼性主義の問題など、セラーズやマクダウエルが中心的役割を演じる現代哲学の諸問題とカントとの間に通じる道を切り開くための突破口とすることができるであろう。その間の事情をめぐる考察については他日を期すほかないが、カントの新しい読み方を開く上での最低限の情報を提示し、さらなる探求の入口まで続く道筋を案内しえたところで、今回は稿を閉じることにしたい。

註

(1) 注意しておかなければならないが、実際には、「線の上」のみならず「線の下」における「まったくの受容性 sheer receptivity」に由来する「非概念的表象」の不可欠の必要性をもセラーズは主張する。そして、重要なことに、マクダウエルは「線の下」におけるセラーズの構想について極度に批判的である。マクダウエルとセラーズの対比、という課題に遂行に当たっては、「線の下」をめぐるセラーズの議論をマクダウエルがどう評価するか、という不可欠の問題が生じるが、その点については今回は触れる余裕がない。

(2) cf. McDowell(2009c). ピッツバーグにおけるもう一人のセラーズ主義者、ロバート・ブランダムが、「経験論の徹底的解体」がセラーズ哲学の根本的モチーフである、と述べていたことを考えれば、マクダウエルが示すセラーズ解釈の独自性は明らかであろう。cf. Brandom(1997, p. 168)

(3) 先の注 2 を参照。

文献

A/B Kant, I. (1781A/1787B). *Kritik der reinen Vernunft*, Hamburg: Felix Meiner.

MW McDowell, J. (1994). *Mind and World,* Cambridge: Harvard University Press.

HWV ——— (1998). 'Having the World in View: Sellars, Kant, and Intentionality', The Woodbridge Lectures, reprinted in McDowell(2009a), (pp. 1-65).

EW ——— (2000). 'Experiencing the World', reprinted in McDowell(2009b) , (pp. 243-256).

KIR ——— (2002). 'Knowledge and the Internal revisited ', reprinted in McDowell(2009b) , (pp. 279-287).

DCE ——— (2006). 'The Disjunctive Conception of Experience as Material for a Transcendental Argument ', reprinted in McDowell(2009b) , (pp. 225-240).

EPM Sellars, W. (1956). Empiricism and the Philosophy of Mind (EPM), reprinted in Sellars(1963) , (pp. 127-196). (2006, 浜野研三訳, 『経験論と心の哲学』, 岩波書店. / 2006, 神野慧一郎・土屋純一・中才敏郎訳, 『経験論と心の哲学』, 勁草書房.)

SM ——— (1967). *Science and Metaphysics*, Atascadero: Ridgeview.

KTE ——— (1967). 'Some Remarks on Kant's Theory of Experience', reprinted in Sellars(2007) , (pp. 435-453).

LTC ——— (1969). ' Language as Thought and as Communication', reprinted in Sellars(2007) , (pp. 57-80).

MFC ——— (1974). 'Meaning as Functional Classification', reprinted in Sellars(2007) , (pp. 81-100).

Brandom, R. (1997). 'Study Guide', in Sellars(1997), (pp.119-181).

——— (2002). 'The Centrality of Sellars's Two-Ply Account of Observation to the Arguments of "Empiricism and the Philosophy of Mind"', in R. Brandom, *Tales of the Mighty Dead,* Cambridge: Harvard University Press. (pp.

348-367).
——— (2004). 'The Pragmatist Enlightenment (and its Problematic Semantics) ', *European Journal of Philosophy*, *12 (1)*, (pp. 1-16).
McDowell, J. (2009a). *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, Cambridge: Harvard University Press.
——— (2009b). *The Engaged Intellect: Philosophical Essays*, Cambridge: Harvard University Press.
——— (2009c). 'Why is Sellars's Essay Called "*Empiricism* and the Philosophy of Mind"? ', reprinted in McDowell(2009a), (pp. 221-238).
Rosenberg, J. (2005). *Accessing Kant: A Relaxed Introduction to the Critique of Pure reason*, Oxford: Oxford University Press.
Sellers, W. (1963). *Science, Perception and Reality*, Atascadero: Ridgeview.
——— (1997). *Empiricism and the Philosophy of Mind*, Cambridge: Harvard University Press.
——— (2007). K. Sharp and R. Brandom (eds.), *In the Space of Reasons; Selected Essays of Wilfrid Sellars*, Cambridge: Harvard University Press.
Sicha, J. (2002). 'Introduction', in W. Sellars, *Kant's Transcendental Metaphysics: Sellars's Cassirer Lectures Notes and Other Essays*, (pp. 1-260), Atascadero: Ridgeview.
Williams, M. (2006). 'Science and Sensibility: McDowell and Sellars on Perceptual Experience', *European Journal of Philosophy 14 (2)*, (pp. 302-325).

〔信州大学准教授・哲学／倫理学〕